

長詩 フェニックスの変容

——ハーバート・リードの創造過程——

笹 本 正 樹

ここに取り上げるハーバート・リードの代表的長篇詩
Mutation of the Phoenix. 「フェニックスの変容」は、
彼の詩集 Collected poems. 1923 のなかの Longer
poems (1920—1934) に収められているものである。

とくにここで取り上げるのは、これがリードの代表的
詩であると共に、芸術家の創造のプロセスを実感的に示
している、と見られるからである。彼がフェニックスの
変身、変容をいかにとらえているかは、彼の創造性、想
像力を示していることでもあるが、ここでは一般的に言
われる創造過程論から、これを取り上げ、創造の情熱の
変容をみていきたいと思う。

Beauty, truth and rarity,

Grace in all simplicity,

Here enclosed in cinders lie.

ここ灰のなかに封じこめられて
すべて質朴なるままに
美、真実と奇跡、すなわち恩寵がある

彼はこの詩の「まえがき」で、このように述べている。
今、フェニックスは死んでいる。ただ、灰があるだけだ
というのである。しかし、その灰のなかには、再生、の
ちの荘麗な美をつくる種子が秘められている。そのこと
は奇跡であり、神の恩寵でもあるとしている。

次に、八節の詩を解釈してみることにする。原文には
見出しはないが、便宜上、ここでは見出しをつけてみた。

一 白炎と旋回

We have rested our limbs

in some forsaken cove

where wide black horns of rock
Weigh on the subdued waters
the waters
menaced to quiet.

Our limbs
settle into the crumbling sand.
There will be our impress here
until the flowing tide
erases all designs the fretful day leaves here.

The blood burns in our limbs with an even flame
The same sundering flame
has burnt the world and left these crumbling sands.
The one flame
burns many phenomena.

The limbs
have their arcadian lethargy
holding the included flame
to a temporal submission.

The flame
burns all
uses the ducts and chambers of our tunnelled flesh
to focus flame
to its innate intensity.

Flame
is a whirl of atoms.
At one moment a whorl of what is seen
—— a shell.

A shell
convoluted through time ——
endless and beginningless time.

Will this sea
throw such symbols round our limbs
when the white surf recedes?
Does a white flame
burn among the waves?

Will a phoenix arise
from a womb evol'd
among the curved crests of foam?
At Aphrodite's birth
were the waters in white flame?

静かになるように
脅かされた波
その沈んだ波にのしかかって
黒く広い岩の岬
その見捨てられた洞窟のなかに
わたしたちは羽や脚を休めている

わたしたちの両脚は渚の
ぼろぼろ崩れる砂のなかに立っている
いらだちながらの日々ここに残すのだ
あらゆるデザインを消して
流れていく潮がめぐって去るまでは
わたしたちの足あとがここに残るだろう

むらのない炎で、わたしたちの脚のなかに血は燃える

これと同じだった炎が、世界を焼き、崩れた砂を残したのだ
ひと揺れの炎が
かぎりない現象を焼きつくしてしまう

その包まれた炎を
一時的に服従させながらも
まだ脚は
牧歌的な昏睡のなかにある

すべてを
燃やす炎は
火をあつめて
固有の強さをもたらし

わたしたちのトンネルのような
肉のなかの導管や空部屋を使う

炎は
原子の旋回である
ある瞬間に見られる渦巻――

巻貝

時間のなかを

旋回する——巻貝

終りなく始めのない時間

白く打った波が引いてゆくとき

潮はわたしたちの脚のまわりに

こうしたシンボルを残すのだろうか

白い炎が波濤のうねりのなかに

燃えているのだろうか

ちぢれる波頭の泡のなかの

拡がってくる子宮から

フェニックスは起き上ってくるだろうか

アフロディテの誕生のときも

白い炎のさなかに波はあつたのだろうか

※

灰のなかからできたフェニックスがどこにいるか、と言うことが最初の問題であろう。リードはこれを、海原の見渡せる岬の洞窟のなかとしたのである。

第五連で、海を見渡すフェニックスがでてくるが、海は人生、あるいは現世ということを示している。現世を俯瞰できるところ、しかも洞窟という、人の来ない場所に籠っているのが、この特徴といえる。

砂のなかに立っているらしいが、まだ創造の炎は脚の方で、ちらちらと燃えるのみである。いろいろなデザインを企画するが、まだどれと固定してはいない。やがては世界を焼く炎であるが、まだ、ひとゆれの炎になつたにすぎない。

フェニックスはまだ、半分ねむっているのである。脚の方に情熱は加わっているが、その熱をむしろ抑制しようとしているようでもある。

炎はやがて、フェニックスの肉体のなかの導管や空部屋をつかつて燃え上つていこうとする。人間でいえば、身体のすべての血管に血がめぐりだしていく——。

それは原子の旋回となる。宇宙の星雲がめぐるのも、原子の小さい旋回も、それは渦巻きであり、巻貝の形であるとみている。生命の根源に運動が始まる時、それは単調な直線的なものではなくて、飽くなき旋回であつて、その輪が次第に大きくなる。同じような輪をえがきながらも、それが大きくなって前進していくのである。

脚に炎が燃えたつ——、その力は潮にも移っていったようである。脚のまわりにシンボルがのこるだろうかと問うている。また、波のうねりのなかに燃えているかと聞いています。

打ち寄せる波がひろがる、あの泡のなかを子宮として、美の女神は誕生するのであるから、白い炎のなかに、芸術家の創造のはじまりをみているようである。

白炎の海潮と、その渚にいたるフェニックスの脚のなかの小さくも赤い炎を思うときに、この鳥を幼少とするよりも、むしろ人間の思考とか、想像力活動の始まりを考へるであろう。むしろ、形而上詩としてリードもさういうことを考えていたと思われる。すなわち、芸術家がこれから何かわからないが、創造のデーモンにおそわれたとき、このように何ともいわれなき炎のおこりを体内に感じ取るのではなからうか。それは集中しなければ、やがて巻貝の炎は退行して、小さくなったり、消えてしまふものかも知れない。

集中力——それは禅の境地でもある。ともかく、神秘的であり、ロマンがあると共に、リードの詩精神は理性的でもある。

2 瞑想と幻輪

Why should I dwell in individual ecstasy?

It is a hollow quarry of the mind
filled with rock dripping, smooth'd with silt;
and only the whorlinded Hamlet walks there
musing in the gutters.

We now leave this infinite well,
where naught is found — naught is definite,
to emerge:
to scan the round of vision,
a greedy eye wanting things finite
and enumerate to the mind.

自分かつてのエクスタシーに
なぜ、わたしは住まねばならないのか
岩のしずくがたれて流れ、その沈泥でふさがれた
うつろな気分の石切場である
渦巻く心のハムレットだけが

溝のなかを瞑想にふけり歩いている。

今やこの無限の井戸から、わたしたちは去って

ここで無が見出される——無は限定されたものなのだ

が——

姿を現わす

幻想の輪をみつめる

有限なものを求める貧欲な眼

そして、それを心に浮かべてみる

※

白炎と巻貝のような旋回のエクスタシーのなかに住んでいるとはいえず、まだ瞑想の段階であつて、うつろな気分である。どのようにしてよいのかわからないので、渦巻く心のハムレットとして表現している。

今や無限の井戸から去つて、と言っている。ようやく

「無」が見出された、としているが、これはいわゆる東洋的無ではなく、naughtすなわちゼロである。ゼロは数理的にはマイナスの終る時点、これよりプラスになるところであるから、無は限定されたもののだが、という

表現をとつたのである。

「幻想の輪をみつめる」というところは、to scan the round of visionとなつている。それゆえにビジョンを

「幻想」としてよいかどうかと考えたが、いちおうこの用語をあててみた。あるいは視界なのかも知れないが、いづれにせよ、ゼロの時点であるから、まだあまりはつきりしたものでないことは確かである。

フェニックスの瞑想は、何を夢みているのであろうか。白炎の旋回において、次第に活気づいてきたこの鳥は有限の世界に気づいたようである。しかし、まだ白炎のなごりの眩暈のなかで、その想像力は幻想の輪をみつめるにすぎない。

夢幻の世界より、有限の世界がのぞく。でもそれはうつろな気分の石切場だと言う。現代人はこうした瞑想のときを、あまりもたない。休息、睡眠はとるが、そして明晰に活動はするが、瞑想により、幻想の輪をうみだすようなことはしない。

しかし、釈迦は正覚をうるときに、座禅をして、瞑想、禅定、三昧などの境地に入つていった。

「自己をはこびて方法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するのは悟なり」

道元の言うのは、三味の境地であろう。しかし、ここでフェニックスはむしろ三味の境地から現実の世界へとめざめてくるようである。

無意識の世界は一種のエクスタシーをもっている。しかし、やはり不安もはらんでいる。リードは瞑想によって、幻輪をえたのであろうか。ここにリードという名のフェニックスを、わたしは思い浮かべることができる。

3 忍耐と端緒

Mind wins decidedly,
hibernating through many years.
Impulse alone is immutable sap
and flowing continuance
extending life to leafy men.
Effort of consciousness
carries from origin
the metamorphic clue.
The cap is here
in conscience humanly unique ;
and conscience is control, ordaining the strain

to some perfection
not briefly known.

長い年月を冬眠して
一瞬に精神は勝利をうる
衝動だけが不死の活力であり
いのちを引きのばして
関心の多いひとびとの
持続することを長びかせる
意識する努力は
メタホリックな端緒を
その根もとから運びだす
人間的であるということのユニークな意識のなか
頂点はここにある
意識は完成にむかって
緊張を命ずる強制力である
単純にわかりはしないが

※

いままで無意識の世界にいたものが、ようやくここで

意識の世界に入る。長い年月をたえ、冬眠してきて、一時に勝利をうるのだとしている。それには持続の活力がなければならぬ。

意識的努力は、メタホリックな端緒をその根もとから運びだす、としている。メタホリックな端緒ということ、をよく考えなければならぬ。リードにおいて、メタホリックな発想というものは、詩人にも、発明家のような科学者にも共通に必要としている。これがすべて文化的なるもののスタートラインであるというのである。

Metaphor「暗喩」とは、AをBと言いかえることによって、Aの存在性をさらに深かめるものである。「太陽は空のバラ」といえば、花々の女王としてのバラを、星々の女王としての太陽にたとえることになる。そこでは、表現者の主観が十分に生かされているのである。リードがフェニックスの意識的努力の端緒にこれをもってきたことは、偶然ではなくて、大いに彼なりに意識していたことである。認識することのはじまりを、彼はこのメタホリックな能力に重点をおいているからである。

「頂点はここにある。」人間のであるということのユニークな意識。

これらの言葉も、よく考えると、フェニックスの言う

言葉ではなくて、詩人、文人としてのリードの言葉である。夏目漱石が芥川龍之介に、「人間を押すのです、牛のようにうんうんと押すのです」といった言葉は有名であるが、このようにリードも、人間的であることの意識が頂点であるという意見をもっているのである。

さらに「意識は完成にむかって、緊張を命ずる強制力である」としている。

Conscience is control, ordaining the strain to some perfection.

意識的であるということは、対象を明確にみられると同時に、自己をも明確に批判できるといふことである。

自己を強制できるものが、完成にむかうことのできるものである。そのあとに彼は not briefly known とおている。事実、これはわれわれが知っていても、なかなか実行しないことであるから、経験的にはそれほどわかっていないことである。

自己を完全にコントロールできるものは、精神界の王者である。内部支配者である。やはり、これはわかっていてもなかなかできないことであろう。カントのような人でなければむずかしいことである。

4 反俗と清浄

We must not be oversubtle with these fools
else we defeat ourselves, not urging them.

They are in the filmy undergrowth
driven by frenzies whom they see
seductively mirrored in their minds.

Yet how persuade a mind that the thing seen
is habitant of the cerebral cave
and has elsewhere no materiality?
But like a lily lust
haunting the wither'd groins of crones
is a phantom desperate to reason.

Shall the phoenix devour
the horrid insurrection?

His flames are incinerary of much evil—
of all evil evident to the mind.

But here where naught but sick moonshine
is thrown from reflective facets
the seductive are the more lustreful phantoms.

In the clearings : in solar ruddiness
ends lunar moodiness.

There silhouettes are etched
not phantomly
but in living areas of the mind.

わたしたちはこれらの愚か者どもと
あまり親しすぎてはいけない

でなければ、彼らを馳りたてるどころか
こっちが敗けてしまうからだ

やつらは薄い発育不全の草のなかで

自分の心の鏡に魅力的に映っているため
そこにみられる狂乱によって追われている

だが、見るということは大脳の洞穴の住人であり、
どこにも物質性をもったものがないということ

どのようにして心に説き聞かせようか
もろい欲望に似て

道化師の弱った股ぐらゐに出入りするものは
理性に絶望した幻であろうか

フェニックスに
そのいやらしい暴挙をくわせようか

フェニックスの炎は多くの炎害を灰にしてしまうから
——心に対して、はつきりとすべて災害となるものを

しかし、ここでむなしく病んでいる月光が

反射するグラス面から投げられてくる場合には

その誘惑性はもつと光った錯覚である

清浄にすること、太陽の真紅色のなかで

月の憂うつさが終る

そこでシルエットたちが

幻のようになく

心の生活領域に刻まれる

※

世俗的、卑俗的なものと、交りすぎてはいけないことを、ここでは示している。それはフェニックスの炎を消してしまふことになるからであろう。

卑俗、世俗なるものどもは、そのときそのとき魅力あるもののみえ、狂乱しやすい。それらは「道化師の弱った股ぐらゐに出入りするもの」だとしているから、リードはそれを軽蔑していることは明らかである。それは反

理性的で絶望したものであり、フェニックスに食わせてしまおうかと言っている。

フェニックスは、こんなもろい欲望はその炎で焼いてしまう。自己の精神の強化にマイナスになるものは、すべて焼きはらつてしまうのである。

その重大なことのひとつは、月光の切子面から反射してくるナルシズム、センチメンタリズムである。この誘惑性は強いのだが、これに敗けないで、太陽の真紅色の炎々たる焔で、その月光をしりぞけてしまえ、と言っている。

太陽のものを写す。そのシルエットを生活領域のなかに刻みこめという。炎々たる情熱のもと影となる部分を、その生活史のなかに刻みこむことが、われわれの日常においても大切なものではなからうか。

大きい目的をもつて、堂々と進むことである。そのために日常性のなかにおいて、大いなる犠牲や、影の部分がでてくるが、それをごまかして、薄日のように生きるよりは、どれだけよいかわからない。

そのシルエットの黒い部分こそは、炎の燃えた証拠であるとしなければならぬ。われわれ凡人は、このシルエットを怖れている。

光が強ければ強いほど

影の部分は濃くなる

と言ったのは、ゲートであった。この影の部分が生活領域に刻まれるのを、覚悟しなければならぬ。そして、太陽の光をもつて、自己の意識を磨きに磨いていかなければならない。自己の心の鏡を炎によつて、いつも清淨にしておかなければならない。

明鏡止水

ということは、いつも水が流れていながら光っていないければ、止水の感覚も出てこないで、汚れた水となってしまうであらう。そうでなければ、明鏡であることとはできない。己の火によつて、太陽のまよひに白い鏡をなげればならぬ。

5 波濤と影像

The sea fringe breaks
along the yellow skore
and is finite to the vision.
So time breaks in spume and fret
of intersifted worlds.

Our world is invisible
till vision

makes a finite reflection.

Then the world is finite —
cast in the mould and measure of a finite instrument.

You can't escape : don't escape
poor easeless human mind.

Better leave things finite.

See where that curi'd surf claskes
in a wreath, in a running crest,
in a fan of white flame /

All the past lives there —
lives as time breaks
in spume and fret of intersifted worlds.

All existence
past, present and to be
is in this sea fringe.
There is no other temporal scene.

海のふち飾りが

黄色の岸にそつて碎ける

そして、ビジョンが明確になる

時間は内でふるいにかけられた世界の

泡と冪つなぎのなかに碎ける

ビジョンが

有限の反映をするまで

世界は眼にみえない

それから世界は有限となり――

有限である道具の

鑄型と物指しに追いこまれる

あわれにも休むことのない人間の魂

あなたは逃亡できないし、そんなことはしない

事物は限定したままがよい

そのちぢれて岸に寄せる波が

花輪や、走つていく冠毛や

白い炎の扇となつて

音たてているところを見るがよい

すべて過去はそこにある――

ふるいにかけられた世界の泡と冪つなぎに

時間が碎けるときに、

それらすべての過去は生きている

すべての存在、過去も現在も

きたるべきものも

この海のふち飾りのなかにある

これほど現世的な光景はほかにない

※

リードが、フェニックスを海にのぞんだ高い岬においたわけだが、ここでようやくわかってくる。

遠い岸辺に波が白い房飾となつて、寄つてくるのを、フェニックスの眼はとらえているのである。ビジョンが明確になるとしてゐる。

泡と冪つなぎ *time breaks in spume and fret of intersifted worlds* 泡となつて前身に進むもの、そのあと波は冪つなぎとなつて迫つていく。

冪つなぎとはすべてのものを、有機的にむすぼうとするものであろう。知識の海賊といわれたリードには、ふつうの常識的な体系を無視して、どちらかという、知

識の円つなぎをるところがある。あの中華そばのドンブリにある模様のようなものがそれである。四角になつて、それぞれ独立しているようにみえて、実はよくみれば、それらはずっと連なっているのである。

有限のふち飾りがわかつてくれば、われわれはそこでどんな型をとつたらよいか、どんな幅や長さにとつたらよいかかわかつてくる。そうすると、休むことなき仕事の面白さというものがでてくる。

逃亡することはできないし、逃亡することもしなくなる。あくなき創造力の炎のなかに入つていくことができる。

花輪となる波、冠毛のような波、白い扇のようになる波は、それぞれの体系があるかも知れない、それはそれによつて現実界を把握していく手段である。

すべての過去も、そして現在も、未来もこのふち飾りのなかにあるものにほかならない。ただ、現象としていろいろにみることができなければならない。

泡は別として、円つなぎによつて、花輪も冠毛も、白い扇もできてゆくわけである。これによつて世界はみえてくる。有限のビジョンが明確になつてくる。

われわれは知識の大海を、円つなぎによつて、眼にみ

えるものとして、いろいろと論じているのに過ぎぬのかも知れない。

悟つた心は、波も風もない日の大海の青さのようなものであろうか。

6 閃光と存在

The phoenix burns spiritually
among the fierce stars
and in the docile brains' recesses.

Its ultimate spark

you cannot trace.

Its spark out

and out is existence.

Time ends: time being vision —

reflected interaction of any elements.

But vision is fire

Light hurrs the world in the focus of an eye.

The eye is all: is hierarch of the finite world.

Eye gone light gone, and the unknown is

very near.

すさまじい星達のあいだ

これに従う頭脳の深底で

フェニックスは靈的に燃えている

その究極の閃光を

あなたは追いかけることができない

その外へ閃光は

存在そのものである

時間が終る

どんな要素の相互作用にも反映している

ビジョンである時間——

しかし、ビジョンは火である

光は眼の焦点のなかで世界を燃やす

眼はすべてであり、有限界の天使長だ

眼がみてしまえば、光も極まってしまう

未知なるものはすぐ近くである

※

燃えに燃えはじめたフェニックスである。それは星雲のながれと関連があるようである。頭脳のなかの星雲もこれに呼応しているのであろうか。

フェニックスは靈的に燃えているという。宇宙のなかに靈があるとすれば、その靈が地上のフェニックスにやどって燃えるのである。フェニックスとは、また才能ある人のことかも知れぬ。芸術家の魂に入りこんだ靈魂なのであろう。

その燃え上る閃光を追いかけることができない。いまままでに燃えていた火は、ようやく外への火となったのである。

時間が終るとは、時間のことを忘却して、燃えに燃えていることであろう。そのときはどんな要素の相互作用にも反映しているビジョンの時だという。

いろいろな新しい考えがこの時に浮んでくる。よい想いつきが、あとからあとからでてこようとす。

ビジョンは火である。これこそが文化を産む原火というものである。宇宙の光が人間の眼を焦点として、起ったところの原火である。

眼はすべてであり、有限界の天使長だとリードは叫んでいる。

眼がすべてをみてしまったとき、同時に光も走ってしまったときである。そうしたときには、創造すべき未知なるものは、もう芸術家のすぐ前に、想像のなかで、完

成しているのである。

リードは眼の人であつたから、耳や鼻や舌のことは述べない。手（触觉）のこともここではあげていない。それは五官のうちで、眼を第一に尊んだからであらう。創造するものな中には、眼よりも触觉を大切にするタイプもいることは彼もわきまえている。しかし、リードはすぐれた眼の人であるが故に、ここでは眼のことしか述べないことになつたのだと思われる。

第五連では過去や現在や未来のことを述べていたが、ここではすでに、そうした区別はなく、彼の存在がすべて時間を超越して、空間である。空間のなかの究極の存在である。

燃えに燃えているということ、これは存在が最も活動しているということである。空間が時間になるということである。

なぜならば、われわれの存在理由はひとつの閃光となることにほかならないからである。

7 金光と完成

Phoenix bird of terrible pride,

ruddy eye and iron beak /

Come, leave the incinerary nest ;
spread your red wings.

And soaring in the golden light
survey the world ;
hover against the highest sky ;
menace men with your strange phenomena.

For a haunt seek a coign
in a rocky land ;
when the night is black
settle on the bleak headlands.

Utter shrill warnings in the cold dawn sky ;
let them descend
into the shutter'd minds below you.
Inhabit our wither'd nerves.

フェニックスよ、すさまじく誇り高き鳥よ
真赤な眼と鉄のくちばしよ

さあこい、焼却炉のような巢をでて

あなたの真紅の翼をひろげろ

※

黄金の光のなかを翔けぬけて

世界を見おろせ

天空を翼でおおい

あなたの不思議な現象で、人間たちをおびやかしてや

れ

棲みかに

山嶽の突端をさがせ

闇夜には

荒涼たる海の岬にとまれ

寒い夜あけの空に鋭い警世の声を発し

あなたの下で帳（とぼり）をおろした精神に

叫びかけてやれ

そして、わたしたちの萎びた神経に

すみこんでくれ

真赤く燃えあがった火の鳥、フェニックスは今、天空たかくとびあがる。炉をでてきたばかりの炎の鳥である。それが真紅の翼を空にむかつてひろげる。

あたりには黄金のひかりがみちて、人間たちはそのまぶしさに、眼をつぶらなければならぬ。不思議な現象だと思ふ。

これは天才的芸術家について、述べたものであろうか。凡人たちは、こうした天才のことで、たまげてしまふ。

しかし、ひとりの人がものごとを丹念になしとげるときに、やはり黄金体験とでもいったものをするのだと思ふ。

瑠璃為地 宝樹莊嚴

黄金為繩 散衆名華

法華経のなかに、右のような言葉がある。これは釈迦が正覚をひらくときの状況であるようだ。しかし、ほんとうに価値あるものを、自分が創造したというときには、黄金体験というものがあるのだと思ふ。

わたしは少しそれに似た体験をもっている。三ヶ月、毎日、原稿にむかつて一冊の本を完成したときに、わたしの胎内から外に急に黄金の流れる幻想があった。黄金流出というか、黄金流砂体験とも呼んだらよいのだろうか。

どんな小さな作品でも、それが完成した美的調和をもっていれば、それは金光をはなつものである。そして、創造者はそこにエクスタシーというか、黄金体験をするのだと思う。

しかし、そうした芸術家が、黄金の椅子に掛けてはいけない。つねに山嶽の突端にすめ、あるいは海の岬にとまれ、そういう険しいところにいて、いつも現世を俯瞰しているというのである。

そして、時々警世の声を発して、萎えた世俗の人間どもの神経をまともにしてやれと言っている。リードはおとなしい人らしいけれども、内にはこのような激しい情熱をもち、ものごとへの完成度を大切にしたい人であると思われる。また、その人間性と教養とがあいまって、実にイギリス紳士らしい人物を形成したものだと思う。七十五年の生涯に、七十五冊ほどの本がだされている。

8 沈黙と洞窟

This is the holy pheonix time.
The sun is sunken in a deep abyss
her dying life transpires.

Each bar and boss
of rallied cloud the fire receives.

Till the ashen sky dissolves.

The mind seeks ease
now that the moon has risen
and the world itself is full of ease.

The embers of the world
settle with a sigh, a birds wing, a leaf.
There is a faint glow of embers
in the asken sky.

These stars
are your final ecstasy,
and the moon now risen
golden, easeful.

The hills creep in mistily —
the tide now a distant sigh —
like hounds outstretched
they guard the included peace —
the tide a muted ecstasy.

The river carries in its slaty bed
an echo from the sea.

But we leave
even the river is lost.

No sound now.

No colour : all black : a cave.

In the cavern's mouth

the moon is hidden.
Yet still the stars —
intense remnants of time.

O phoenix,
O merciful bird of fire,
Extinguish your white
hungry flames.

これは聖なるフェニックスの時である
太陽はふかく、沈みに沈んでいる
死にかけて生命の臭みがたよう

ふたたび集まる雲の
どんな綺でもどんな突起でも、火は受けとってしまう

灰色の空が溶けてくるまで

いまや月が昇つたので
心は平安を求める
そして、世界が平安でみだされる

世界の残り火に

ため息や、鳥の羽毛や木の葉がおかれる

灰色の空に

残り火のかすかなほめき

これらの星は

あなたの最後のエクスタシー

そして、月は今や

黄金にやすらいでのぼる

丘は霧のなかに横たわり――

いま潮ははるかなる吐息――

のびをした猟犬のように

内なる平和を守って――

潮流は口を閉じられたままのエクスタシー

石盤のベッドへ

川は海からの反響を運んでくる

しかし、わたしたちは

川がなくなれば去ってしまう

いま音はない

色もなく、すべては暗黒の洞穴

地下の大洞窟の口のなかに

月はかくれてしまう

だが、まだ星は――

残りの時をしばたたく

おお、フェニックスよ

おお、情けぶかい火の鳥よ

あなたの白く飢えた炎を

消さねばならぬ

※

盛りをすぎてしまったフェニックスの黒のときを述べている。いわゆるフェニックスの涅槃(ねはん)とでも言ったらよいであろうか。

フェニックスは死にかけている。そして、灰色の空に平安の月がでている。みたされたあとの月がでている。

フェニックスの上には、ぬけた羽毛や、木の葉が覆っていて、残り火のほめきが少しはみられる。

星々もなごりを惜しんで、まばたいている。丘はぼんやりと横たわり、海の潮もはるかなる吐息のようである。いまは海も口を閉じたまま、余韻のようなエクスタシーを感じているようである。

やがて、月は地下の大洞窟のなかにかくれてしまう。そして、闇夜がこようとしている。もとの黒い洞穴にもどろうとしている。フェニックスは燃えに燃えて、いま萎えていく。うつぶしたその姿、そして白い炎も消えていく――。

こうして、序詩の無の状態、灰にかえっていくのである。リードは、五百年ごとに生きかえるという、不死鳥の燃焼をこのように描いてみせた。白い炎から、だんだんと真赤なものに燃え上り、全身を火の鳥として、また黒い洞窟のなかの灰となってしまう。そういう鳥をえがいてみせた。

これは人間をえがいたのであろうか。いや、人間のなかでも創造する人間を表現したのだと思う。かつて、わたしは北原白秋を研究したとき、彼の詩の表現は「青、紺、赤、金、銀、白、黒」と変化していくのを発見した。

それは人間のリビドーの変化を示していたのでもあると思う。青だけ、あるいは赤だけがよく表現されている詩人もある。しかし、白秋の場合は、その頂点は赤から金までであった。二十五才から三十才を頂点としていたようである。それは人間の肉体の最盛期と一致していたのであるかも知れない。

白秋における白の時代は四十代とすれば、黒の時代は五十代であった。

一般の人では左のようなことになるのかも知れない。

二十代	青の時代
三十代	赤の時代
四十代	金の時代
五十代	銀の時代
六十代	白の時代
七十代	黒の時代

ともかく、フェニックスはこうして、ふたたび黒い洞穴のなかに消えてゆく。そして、五百年あとにふたたび、生起してくるのである。

しかし、このことは人間において考えれば、どこか宇宙のはてから靈魂がやってきて、燃えつきて、ふたたび天空に去るというのに似ている。

芸術家で言えば、ひとつの作品をつくり上げて、そのあとを燃えつきているのに似ている。真の芸術家ならば、その生涯にいくどもこのような現象をくりかえすことになるであろう。少くともわれわれはこの詩によつて、人間が精魂こめて、何ごとかをなす、そのプロセスを示されたことになる。

創造の火焰というものは、このようにすさまじく燃え上り、また暗黒の闇のなかへ落ち入っていくものである。天上と地獄のあいだを往復する、そうした大きな振幅をもった聖火だと思う。

結 語

以上のことからかえりみるに、次のようなことが要約して考えられる。

- 一、白炎の旋回
- 二、瞑想の幻輪
- 三、忍耐の端緒
- 四、反俗の清浄
- 五、波濤の影像
- 六、閃光の存在

起

承

転

七、金光の完成 八、沈黙の洞窟

結

それはひとつの人生プロセスであると同時に、一つの芸術作品の創造過程でもあると思われる。フェニックスというすぐれた鳥の生きざまでもある。

- 白炎の旋回——10歳まで
- 瞑想の幻輪——20歳まで
- 忍耐の端緒——30歳まで
- 反俗の清浄——40歳まで
- 波濤の影像——50歳まで
- 閃光の存在——60歳まで
- 金光の完成——70歳まで
- 沈黙の洞窟——80歳まで

とみるのも面白いものであろう。

これを創造過程とみる時には、やはり反俗の姿勢とすることが、大きい契機を占めることになるし、金光の完成ということが、魅力的なものである。発明、発見ということも、こうしたプロセスによるものである。ここにはリードの生き方が実によく示されていると思う。リードもやはり一羽の不死鳥であったというべきなかも知れない。彼はメタホリックなものを大切に、

忍耐と反俗により、現実界の枠ぐみを知り、そのなかで閃光をひらめかせ、真紅の不死鳥として、みずからを完成していったのである。

彼は確かに優雅なる紳士ではあつたが、また誇りたかい不死鳥でもあつたからである。

また、ここには彼の認識体系、美学体系をつらぬくところの、アイコン||イデア||シンボルといった経過がみられる。ここで初めに燃えた白炎、それはアイコンをさしたものである。そして、イデアとなり、最後にシンボルをこの世に残していくのである。

そうした創造の力が人間という生きものにあるということ、それは神の恩寵であるとみているようである。彼の発想の端緒がイメージでなく、アイコン（聖像）であることに注目しなければならぬと思う。そうした意味では、不死鳥はやはり自由人の魂であると共に、神の魂でもあるのである。